

述語のアスペクト特性に関する言語類型

—形態的特徴からの分析¹⁾—

山 田 昌 史

はじめに

1. 結果を表す構文：形態的特徴からの一般化
 1. 1. Talmy (1985)のタイポロジー
 1. 2. 述語のアスペクト特性とタイポロジー
 2. 結果構文の諸相
 3. 「結果」を意味する構文における言語タイプ
 4. 形態要素と「結果」を表す構文：Snyder (1995), Snyder (2001)
 5. 「結果」を生み出す普遍原理と個別言語を生み出すメカニズム
- 結語

はじめに

英語の *John walked to the top.* という表現に対応する日本語の文「ジョンは頂上へ歩いた」が不自然に感じられ、仮に容認可能であったとしても英語の文が頂上への到着を含意するのに対して、日本語のそれは到着の意味を含意しない。英語と同じ到着の意味を表すためには、「歩いて行った」のような複雑述語の形成が必須となる (Yoneyama (1986))。この事実から、到着の意味を生み出すためには、日英語では形態的な表示に差があることが分かる。また、上記の英語に対応するスペイン語の表現、*Juan caminó hasta la cima.* には英語と同様な到着の意味がないとされる。英語と相同の到着を含意させるためには、「歩く」という移動様態を表す動詞ではなく、*Juan subió a la cima.* のように到着を本来的に含意する動詞を使わないと到着の意を表すことができないとされる (Aske (1989))。

このような現象に対して、Talmy (1985)は、移動を表す表現が個別言語においてどのように表出するか、広く事実を観察し、人間の移動に関わる普遍的な認知的要素（「移動」「様態」「経路」など）を認定し、その組み合わせパターンによって個別言語が大きく2つのタイプに分類されることを提案している。英語などゲルマン諸語が示す「移動」に「様態」が組合わさるタイプ (satellite-frame言語) とスペイン語などのロマンス諸語が示す「移動」に「経路」が組合わさるタイプ (verb-frame言語) の2つである。しかし、Talmyの分析は、(i) タイポロジーという、いわば、「傾向」を示したものに過ぎず、理論的な検証性が低い点、(ii) 同じ言語タイプに分類される言語群にもその現れ方に有意な差がある点など、理論的・分類的に問題があり、人間言語の生成メカニズムを考察する上で、それは、より反証性の高い普遍メカニズム (cf. Chomsky (1965, 1981, 1986, 1995, 2005) など) によって、再分析する必要があると考えられる。そこで、本論は、特に「結果」を表す2つの構文 (上述の移動を表す文と結果構文) についてこれまでの議論をまとめ、(I)

Talmy (1985)の言語タイプは、認知的な概念から導きだされるのではなく、述語の意味的特性（特に、そのアスペクト的特性）の表示手段の違いから導き出されることを示し、(II) 日本語の「結果」を含意する構文に特徴的な形態合成手段を基盤として理論を整備して、より反証性の高い理論を提案する。つまり、「結果」を意味する構文の言語タイプを動詞の形態的な特徴から捉え直し、人間言語に普遍的に存在すると考えられる素性を仮定することで、「結果」を表す構文の普遍原理を導き出し、また、その素性の値の組み合わせから言語タイプが導きだされることを主張する。

本論の構成は、以下である。1節では、Talmy (1985)のタイポロジーを検討して、その問題点を指摘し、(i) それは述語のアスペクト特性という意味的概念に収斂すること、(ii) 形態的な特徴から3つの言語タイプが存在することを示す。2節では、結果構文をその意味的特徴と個別言語における違いから観察したWashio (1997)を検討し、その分析を拡張し、移動動詞と同様に形態的特徴から言語を3つのタイプに分類する必要があることを示す。3節では、1・2節の2つの構文から別々に導き出した言語タイプを「アスペクト転換」という意味的概念から一般化できることを主張する。4節において、形態的特徴から結果を意味する文について理論的枠組みを提案したSnyder (1995, 2001)を概観した後に、5節において、3節で導いた一般化が人間言語に存在する普遍的な素性と仮定する[±Overt Morpheme]、[±Covert Morpheme]の組み合わせから捉えられることを示す。この提案により、Talmy (1985)の言語類型は、抽象的な素性から導き出され、普遍性を備えた理論的検証性を持つ枠組みへと生まれ変わる。最後に、本論をまとめる。

1. 結果を表す構文：形態的特徴からの一般化

本節では、本論が議論する「結果」を表す2つの言語現象の中から、特に、移動動詞について先行研究で指摘されてきた事実をまとめて再分析し、その形態的な特徴から事実を捉え直すことで新たな一般化が可能であることを示す。まず、1.1節において移動動詞についてTalmy (1985)のタイポロジーを概観する。そして、1.2節でタイポロジーより高次の意味的概念である述語のアスペクト特性の観点からTalmyの分析を捉え直す。そして、述語のアスペクト特性をそれぞれの言語においてどのように表示するのか、形態的な観点からとらえ直すと、Talmyとは異なり3つの言語タイプを認める必要があることを示す。

1.1. Talmy (1985)のタイポロジー

本節では、「移動」の概念について考察し、個別言語の事実を検証することで移動動詞のタイポロジーを提案したTalmy (1985)について議論する。Talmyは、移動動詞を人間の認知的な側面から観察し、「移動(=Motion)」と結びつくことが可能な移動の側面、つまり、その主体がどこを移動するかを表す「経路(=Path)」、主体がどのように移動を行うかという「様態(=Manner)」などが、個別言語においてどのように語彙化されるかについて観察し、いくつかの言語のタイプに分類できることを提案している。

「移動」に関わる認知的側面とは、その移動を行う実体(=移動物(=Figure))とその移動の参照点(=Ground)、それと移動の経路の3つの要素の同定が人間言語の移動という概念を語彙化する際に欠かすことのできない要素である。また、移動がどのような手段でなされたか(様態)、その移動を駆動するものは何なのか(原因(=Cause))といった要素

も移動を語彙化する際に関わる要素であるとされる。このような5つの認知的概念を基に Talmy (1985)では、個別言語においてどのような要素が「移動」という概念と結びついて動詞として表出するのかについてさまざまな言語の事実を観察し、大きく2つの言語タイプを提案している。

1つは、「移動」に「様態」を取り込んで1つの動詞として表示し、「経路」を外的に表示する言語タイプ (= satellite-frame言語) である。以下の例を観察する。

(1) a. The rock slid/rolled/bounced down the hill.

b. I ran/jumped/stumbled/rushed/groped my way down the stairs.

(Talmy (1985:63))

(1)では、「移動」とその様態「表面をなめらかに」、「回転しながら」、「跳ねながら」といった概念を1つの語彙として表している。そして、その移動の及ぶ場所(移動の着点)を down the hill, down the stairsという前置詞句として表示している。このように、英語の場合²⁾、「移動」と「様態」を1つの動詞として表示し、「経路」を付加詞として表す傾向を持つ言語である。

もう1つは、移動の概念に「経路」を取り込んで「様態」を外的に表示する言語タイプ (=verb-frame言語) である。イタリア語・スペイン語などは、英語とは異なり「移動」と「経路」を合わせて1つの動詞として表し、「様態」は付加詞として文に生起させる。

(2) a. La botella entró a la cueva (flotando)

the bottle MOVE-in to the cave (floating)

‘The bottle floated into the cave.’

b. Metí el barril a la bodega rodándolo.

I-MOVE-in the keg to the storeroom rolling-it

‘I rolled the keg into the storeroom.’

(Talmy (1985):69-70)

(2)のイタリア語の移動動詞は、「移動」にその「経路」(inとして表示)を取り込み1つの動詞として生じている。そして、その「様態」は付加詞として生じている。

このように、「移動」に「様態」を取り込むのか、「経路」を取り込むのかによって、2つの言語タイプが存在することを Talmy (1985)は主張している。

このタイプ分けの妥当性は、英語とスペイン語の翻訳小説の対照研究を行った Slobin (1996)によって経験的に裏付けられている。

(3) a. The three women drifted inertly down the hot street.

b. Las tres mujeres siguieron, pausadamente, calle abajo.

‘The three women continued, slowly, down the street.’ (Slobin (1996):212)

(3a)の英語は、移動の様態が動詞に取り込まれて1つの動詞 (drift) として表示されている。一方、(3a)の翻訳である(3b)のスペイン語の例では、動詞 (siguieron) は移動のみで様態を含意せず、それは副詞として文に生起している。

また、移動動詞と「経路」を表す前置詞句との共起関係にも違いが見られる。

- (4) a. I went through the drawing-room to the morning-room.
 b. Pasando por el salón, fui al gabinete.
 ‘Passing through the drawing-room, I went to the morning-room.’
- (5) a. He strolled across the room to the door.
 b. Se dirigió a la puerta.
 ‘He went to the door.’ (Slobin (1996) : 211)

(4a)の英語では、1つの動詞に対して2つの経路（through the drawing-room、to the morning-room）が共起しているのに対して、その翻訳である(4b)では、文に2つの動詞（pasando, fui）が現れ、それぞれに対して1つずつ経路が共起している。(5)では、英語に存在している経路句は、スペイン語へ翻訳の際に削除されている。移動の「経路」を動詞に包含する傾向を持つverb-frame言語に分類されるスペイン語は、「経路」を外置することを好まない。一方、satellite-frame言語に分類される英語は、動詞に取り込むのは「様態」であるので、「経路」は外置する傾向が強い。そのため、複数の経路句が1つの動詞と共起できる。このように、ロマンス諸語とゲルマン諸語では、動詞に包含される要素が異なることから、同じ意味的概念を表す際にその表現が異なることが見てとれる。

しかし、Talmy (1985)の主張はタイポロジーの域を超えるものではなく、以下のように英語であってもverb-frame言語の、ロマンス語であってもsatellite-frame言語の特徴を持つ移動動詞が存在する。

- (6) a. John entered the room.
 b. Juan bailo en círculos.
 ‘(lit.) Juan danced in circles (=around)’
 c. El libro se deslizo hasta el suelo.
 ‘(lit.) The book slid down to the floor.’ (Aske (1989):3)

(6a)の英語の移動動詞enterは、「移動」に「内的な空間へ」という「経路」が包含して動詞を形成している。他にも、ascend, descendなどの上下への方向を移動の概念と組み合わせると語彙化するsatellite-frame言語の特徴とは異なる動詞が見られる。一方、(6b-c)のスペイン語の例は、移動の概念にその様態の意味を包含した移動様態動詞である。このように、Talmy (1985)はタイポロジーの提案によって言語に見られる傾向を示したものにすぎず、高い理論的検証性を備えた主張ではない。

日本語は、Talmy (1985)のタイポロジーにおいて、どちらの言語タイプに属するののかについても議論がある。田中&松本 (1997), Ohara (2002)などは、以下の事実から日本語はロマンス諸語と同じverb-frame言語に分類されるとしている。

- (7) a. 彼は {意気揚々と／車で／歩いて} 山の頂上まで登った。
 b. 彼は {意気揚々と／車で／歩いて} 川を渡った。 (田中&松本 (1997):141)

「登る」「渡る」という動詞にはそれぞれ「上へ」「対向へ」という「経路」が含意されており、ロマンス諸語と同じverb-frame言語の特徴を示す。また、(8)のように「経路」を包含する移動動詞と(9)のように「様態」を包含する移動動詞を列挙すると、圧倒的に前

者が多いことから分かる。

- (8) 行く、来る、登る、下る、上がる、降りる、落ちる、沈む、帰る、越える、渡る、越える、渡る、過ぎる、抜ける、横切る、曲がる、くぐる、回る、巡る、寄る、通過する、入る、出る、至る、達する、着く、到着する、去る、離れる、出発する
- (9) 歩く、走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ、潜る、急ぐ
(田中&松本 (1997):141-143)

このような事実から日本語は、ロマンス諸語と同様に「経路」を動詞に取り込むタイプの **verb-frame** 言語であるとされてきた。しかし、日本語は、ロマンス諸語とは決定的な差がある。以下の例を観察する。

- (10) ジョンが駅へ走って行った。 (Yoneyama (1986):2)
- (11) a. 1人の男がポーチに歩み出た。
b. ヤシの実が浜辺に流れ着いた。 (影山&由本 (1997))

どの例も「移動」と「経路」が複合している例である。ロマンス諸語では、動詞の内部に「経路」が完全に取込まれ、1つの動詞として表示されていた ((2)参照)が、上例の日本語では、動詞として語彙化するはずの「経路」の概念の一部が形態的に表示されて複合動詞となっている。主動詞に複合している形態素「行く」「出る」「着く」は、どれも主動詞の動作の「結果」を表す動詞である。これらの動詞を(8)と同じタイプの動詞であると思えば、(10)-(11)は、「経路」と「移動」が融合して1つの概念を構成する **verb-frame** 言語の特徴を示す動詞となる。しかし、動詞に取り込んだ「経路」を形態的に表示する点は、「移動」と「経路」を完全に1つの動詞として表示し、形態的にそれらを区別しないロマンス諸語とは、動詞の構成に大きな差がある。これまでの先行研究 (Talmy (1985)、田中&松本(1997)、Ohara (2002)など参照) は、このような日本語の事実に着目して言語分類を試みて来なかった。このような事実に着目して、Talmy (1985)を捉え直すことで、新たな言語の分類が可能であると考えられる。

1.2. 述語のアスペクト特性とタイポロジー

前節では、Talmy (1985)の移動動詞の言語タイプについて概説し、それが理論的検証性を備えていない点、同じ言語タイプに分類される言語群の中にも動詞の構成の仕方に違いがあることがある点など、再考すべき点があることを指摘した。そして、このタイポロジーは、日本語の事実を中心として捉え直すことで新たな分析が可能であることを指摘した。本節では、Talmyの認知的な観点からの移動動詞のタイポロジーではなく、動詞のアスペクト的性質を精査することで移動動詞のタイポロジーを提出する分析 (Dowty (1991), Levin & Rappaport (1995), Tenny (1994)など参照)について概観し、Talmyのタイポロジーは、述語のアスペクト特性というより抽象度の高い意味的な概念から捉え直す必要があることを述べる。

まず、以下の例を観察する。

(12) a. John walked to the top.

b. Juan caminó hasta la cima.

‘(lit.) Juan walked up to the top.’

(Aske (1989):9)

(12)は、それぞれ英語とスペイン語の「足を動かして進む」という意味を表す移動様態動詞に着点句を共起させて形成した文である。2つの文は、同じ要素から成り立っている文であるため、一見すると同じ意味を表すように思われるが、言語間で意味的含意が異なる。(12a)の英語では、「足を動かして移動していった」先、つまり、頂上への到着点を含意するが、(12b)のスペイン語では、頂上への到着までは含意せず、移動の方向を示すのみである。同様なことは、Higginbotham (1999)が指摘する以下の例にも見られる。

(13) a. The boat is floating under the bridge. (goal / locative)

b. La barca galleggia sotto il pont.

the boat float under the bridge (locative)

‘The boat is floating under the bridge.’

(Higginbotham (1999):132)

(13a)が英語の例、(13b)がイタリア語の例であるが、いずれも「ユラユラと浮かぶ」という意味の移動様態動詞に前置詞句を付加して文が構成されている。(13a)は、(i) ボートがユラユラと揺れて流れてゆき、最終的に橋の下にたどり着く、(ii) ボートがユラユラと揺れている場所が橋の下である、という2つの意味が存在する。一方、(13b)は、(ii)の意味は表すが、(i)のような移動によってある位置への到達したことは含意しない。つまり、2つの言語には、移動様態動詞に着点句を付加して、その地点への到着を含意できるか否かに違いがある。このような、到着の含意に関する言語的差異は、述語のアスペクト的特性(特に、述語の有界性 (Dowty (1991), Tenny (1994)など参照))を観察することで検証できる。述語が表す動作に限界点があることを表す述語 (=有界述語) の場合、in an hourのような期間を限定する副詞句を述語に付加できるが、述語の表す動作が際限なく続き、その終了点が明確ではない述語 (=非有界述語) の場合、for an hourのようなある時間的に広がりのある長さを表す副詞句を付加できる。この観点から、英語・スペイン語の事実を確認すると以下のような違いが観察される。

(14) a. John danced for/*in an hour.

b. John swam for/*in an hour.

(15) a. John ran to the next town in/*for an hour.

b. John walked to school in/*for an hour.

(Tenny (1994):77)

(16) a. Juan caminó hasta la cima ?*en dos horas.

‘(lit.) Juan walked up to the top in two hours.’

b. Juan caminó por/a-traves del tunnel ?*en dos horas / dos horas.

‘(lit.) Juan walked through the tunnel in two hours/for two hours.’

(Aske (1989):7)

(14)では、それぞれの動詞がfor~と共起しin~とは不共起であることから非有界的な性質

を持っていると言える。つまり、動作の継続は示すが、動作の完結は含意していない。一方、(15)のように、(14)のそれぞれの文に着点句を付加すると共起可能な副詞句が逆転し、有界的な特徴を示している。この場合、述語の表す動作に時間的な限界があることを意味する。(15)に対応するスペイン語の例 (= (16)) は、in~に相当する期間句と共起しないことから、これらの例が有界的でないことが分かる。また、イタリア語もスペイン語と同様に、移動様態を示す *correre* ‘run’ は、非有界的な性質を持つが有界的な解釈は持つことができない。

- (17) a. **Gianni e corso lungo la spiaggia in un’ora.*
 ‘(lit.) John ran beside the beach in an hour.’
 b. *Gianni ha corso lungo la spiaggia per un’ora.*
 ‘(lit.) John ran beside the beach for an hour.’ (Folli (2001):185)

(14)-(17)に含まれる動詞は、本来的には英語でもロマンス諸語でもin~句と共起できず、非有界的な性質を持つ。しかし、英語では、(15)の例に見られるように移動動詞が前置詞句と共起すると、期間を限定する副詞節と述語が共起可能となり、述語のアスペクト性が本来の非有界的なものから有界的なものへと転換している。一方、ロマンス諸語の例では、移動動詞と前置詞句が共起しても有界性の変更は起こらず、非有界的な性質のままである。このことから、(12)-(13)の意味的含意の違いと(15)-(16)の文法性の違いは、2つの言語に見られる非有界述語の有界述語への転換（本論では、これを「アスペクト転換」と呼ぶ。）の言語的違いにあると説明される。

また、日本語の移動動詞をアスペクト性の観点から検証すると、上述の2つの言語タイプとは異なる特徴を観察することができる。日本語では、「経路」を含意する移動動詞は、以下のように、着点を伴うと有界的な性質を示す。

- (18) a. 太郎が駅に {1時間で/*1時間} 着いた。
 b. 太郎が家に {10分で/*10分間} 帰った。
 c. 太郎が富士山（の山頂）に {1時間で/*1時間} 登った。

一方、移動様態動詞は以下のように非有界である。

- (19) a. ジョンが {1時間/*1時間で} 走った。
 b. 太郎が {1時間/*1時間で} 泳いだ。
 c. その赤ちゃんが {1時間/*1時間で} 這った。

これらの動詞に着点句を付け加えたとしても容認可能な文とはならず、前節で考察したロマンス諸語の事実と符合する。

- (20) a. ジョンが駅に {1時間/*1時間で} 走った。
 b. 太郎が対岸へ {1時間/*1時間で} 泳いだ。
 c. その赤ちゃんが向こう側に {数分/*数分で} 這った。

しかし、Yoneyama (1986)が指摘しているように、着点句は、(21c)のように複雑述語を形成することで移動様態動詞と共起可能となる。

- (21) a. ジョンが走った。
b. ?ジョンが駅へ走った。
c. ジョンが駅へ走って行った。 (Yoneyama (1986):1-2)

同様に、(20)の移動動詞に到着の意味を持つ動詞を結合して複雑述語を形成すると、有界的な性質を持つ文法的な文が生成する。

- (22) a. ジョンが 駅に |*1時間/1時間で| 走って行った。
b. 太郎が 対岸へ |*1時間/1時間で| 泳ぎ着いた。
c. その赤ちゃんが 向こう側に |*数分/数分で| 這って行った。

ここで重要なのは、(19)のように、本来、非有界的な性質を持つ「走る」「歩く」などの移動様態動詞が、(22)のように複雑述語の形成によって有界的な性質を持つ動詞へと変化して、「到着」を表す文となることである。同様の例は、影山・由本(1997)にも見られる。

- (23) a. 1人の男がポーチに?*歩んだ/歩み出た。
b. ヤシの実が浜辺に?*流れた/流れ着いた。 (影山&由本(1997):151)

(23)の事実も、以下のように、どれも有界的な性質を持つ。

- (24) a. 1人の男がポーチに*10分/10分間で歩み出た。
b. ヤシの実が浜辺に*1年間/1年間で流れ着いた。

このような事実は、日本語のアスペクト転換は、主動詞に結果を表す形態素を複合する形態合成によってなされることが分かる³⁾。この点が、同じverb-frame言語に分類されるがアスペクト転換を有しないロマンス諸語と異なり、また、アスペクト転換に形態素を必要としない英語などの言語との違いである。

そこで本論では、Talmy (1985)のタイポロジーを再構築し、特に、移動動詞におけるアスペクト転換を日本語に見られる形態プロセスを中心に捉え直し、以下の3つの言語タイプを提案する。

- (25) (i) 日本語は可視的で音形に現れる形態素によって、アスペクト転換が可能である。
(ii) 英語を中心とするゲルマン諸語は、形態プロセスによらず着点句と移動動詞が共起するだけでアスペクト転換が可能である。
(iii) イタリア語・スペイン語などのロマンス諸語は形態合成・移動動詞の着点句との共起のいずれの手段によってもアスペクト転換が不可能である。

移動動詞は、形態的な観点から、(A) アスペクト転換が可能か否か、(B) 明示的な形態素を使うか否かによって3つの言語タイプに分類されると分析する。(A)の観点からロマンス語が他の2つの言語とは異なる性質をもち、(B)の観点からは日本語が特徴的な性質を持つ。つまり、Talmy (1985)でverb-frame言語とみなされた日本語とロマンス語は、形態的な特徴から事実を精査することで区別の必要性があることが分かる。

次節では、移動動詞と同様に述語に結果を表す語または句を付け加えることで変化主体の結果を含意する文を形成する結果構文を観察して、(25)と同様な形態要素からの3つの

言語タイプの認定が必要であることを明らかにする。

2. 結果構文の諸相

本節では、移動様態動詞と同様に結果を表す前置詞句や形容詞句を動詞と共に起することで「結果」を意味する構文(=「結果構文」)について、その基本的な性質と個別言語における現れ方の違いを概観する。

よく知られているように、結果構文は動詞句に結果述語を共起させると、動詞句の示す動作の後に生み出される被動作主体の最終的な結果状態を表す文である。

- (26) a. John pounded the metal flat.
b. John painted the wall red.

(26)は、それぞれ「金属をたたく」「壁を塗る」という述語が本来表す動作の結果として、その動作の被影響者の状態が変化し、被影響者が最終的にそれぞれ「平らになった」「赤色になった」ことを意味する文である。つまり、結果構文は、基体となる述語とその述語の表す動作の結果として生ずる結果状態を表す結果述語の2つの要素が結合して1つの出来事を表す文である。

また、結果構文は、(21)のように基本的には有界的な事態を表す。

- (27) a. The waiter wiped the table(in/for two minutes)
b. The waiter wiped the table dry(in/*for two minutes)
(Levin & Rappaport (1995):58)

(27a)のように、本来的には有界・非有界の解釈を持ちうる述語wipe the tableは、(27b)のようにdryという述部の描く事態の結果を表す語と共に起して結果構文を形成すると有界的な解釈のみ持つ。つまり、結果構文は有界的な性質を持つのである。

このような特徴を持つ結果構文であるが、その構文形成プロセスは一様ではないと指摘する分析が存在する。Washio (1997)は、結果構文を形成する述語の意味的含意と結果述語が表す意味の関係を精査することで、結果構文には2つのタイプが存在することを論じている⁴⁾。

以下のような結果構文とその基体動詞の意味を考えてみる。

- (28) a. The horses dragged the logs smooth.
b. The jockeys raced the horses sweaty.
(29) a. *drag*: to pull(something heavy)along with great effort.
b. *race*: to cause(an animal or vehicle)to run a race. (Washio (1997):10)

(28)を形成する動詞の意味は、それぞれ(29)のように記述されるが、これらの動詞の意味の中には、結果述語の表す状態は含意されていない。その一方で、(30)のような結果構文の基体動詞を観察する(=31)と、上記の結果構文とはその性質には大きな違いが見られる。

- (30) a. Mary dyed the dress pink.
b. I froze the ice cream hard / solid.

(31) a. *dye*: to give a(different)color to(something)by means of dye.

b. *freeze*: to cause to harden, esp. into ice, as a result of extreme cold.

(Washio (1997):10-11)

(30a)の基体動詞*dye*の意味 (=31a) には、「染める」という出来事によって生じる結果状態、つまり、本来と別の色が与えられることが記述されている。(30b)も同様に、基体動詞*freeze*の意味には、動作の結果として生じる状態が記述されている。つまり、(28)と(30)の結果構文は、一見すると同じように見えるが、述語が記述する出来事を精査すると動詞の意味に結果性の含意に違いがあるかどうかの違いがあることが分かる。(30)の結果構文には、動詞があらかじめ変化の含意を持つが、(28)にはない。(28)は、動詞は本来、結果を含意しないが、結果述語と共起すると述部に結果の意味的含意が生じる。

Washio (1997)は、動詞が持続的・継続的な意味を持ち本来的に結果を含意しないが、それに結果述語が共起することで動作の被影響者が結果述語の描写する状態へと変化することを意味する(28)のような結果構文を**strong resultative**、動詞が本来的に結果性を持ち、結果述語がその結果を表示する働きを有する達成動詞や作成動詞から成る(30)のような結果構文を**weak resultative**と呼んで区別する⁵⁾。

また、Washio (1997)は、上述の結果構文の2つのタイプを基準として、個別言語の事実を確認すると、それらは、一様の現れ方をしないことを観察している。

(32) a. The horses dragged the logs smooth. (strong resultative)

b. She kicked the dog black and white. (strong esultative)

c. John rocked the dough thin. (weak resultative)

d. John polished the metal shiny. (weak resultative)

(Washio (1997):6)

(33) a. *Jean chevauxont traine les rondins lisses. (strong resultative)

‘The hours dragged the logs smooth.’

b. *Jean a battu Marie sanglante. (strong resultative)

‘John beat Mary bloody.’

c. *J’ ai peint le mur rouge. (weak resultative)

‘I painted the wall red.’

d. *Jean l’ a fusille mort. (weak resultative)

‘John shot him dead.’

(Washio (1997):28)

(34) a. *馬が丸太をスベスベに引きずった。 (strong resultative)

b. *彼女は息子を痣だらけに蹴った。 (strong resultative)

c. ジョンはパン生地を薄く延ばした。 (weak resultative)

d. ジョンは金属をピカピカに磨いた。 (weak resultative)

(Washio (1997):6)

英語 (=32) は両タイプの結果構文が比較的自由に生成可能である。フランス語 (=33) は、いずれの結果構文の生成できず、日本語 (=34) は**weak resultative**は生成可能であるが、**strong resultative**は不可能である。ここまでの事実、以下のようにまとめられる。

(35)

	英 語	日本語	フランス語
Strong Resultatives	✓	*	*
Weak Resultatives	✓	✓	*

(Washio (1997):30を修正)

日本語では、結果構文の生成は、動詞が結果状態の含意を語彙的に持ちうるか否かに影響を受ける。動詞が記述する出来事に結果性の含意がなければ、日本語では結果構文が生成されない。このように、Washioは、結果構文を基体動詞と結果述語の意味的な関係によって二分割し、その二分法が個別言語による結果構文の文法性の違いを説明すると論じている。

しかし、日本語のstrong resultativeの生成は、常に阻止されるのではない。以下のように動詞の形態を複雑にすると生成が可能となるものがある（影山 (1996), Hasegawa (1998)参照）。

- (36) a. 彼は鉄を平らにたたき延ばした。
 b. ランナーがシューズをボロボロに走り潰した。

(36)の「たく」「走る」は、本来、strong resultativeを形成する非有界の性質を持つ動詞であるが、これらの動詞に変化主体の結果を表す動詞を複合して複雑述語を形成すると、容認される。つまり、先に議論した移動動詞と同様に、日本語の結果構文の中には、結果を含意する形態素を主動詞に結合して複雑述語を形成することで生成可能なものがある。この点が日本語に特徴的な点で、英語やロマンス諸語とは異なる部分である。

本節では、結果構文についてその特徴とタイポロジーの両面から検討してきた。結果構文の生成は、ロマンス諸語においてはかなり制限され、英語では、動詞に変化主体である名詞句と結果述語が生じ、意味的な齟齬が生じなければかなり自由に結果構文の生成が可能である。日本語は、動詞自体が結果性を含意するものであれば、その結果の意味を結果述語で表示できるが、そうでない動詞は単一の動詞によって結果構文の形成ができず、結果性の含意を持ちうる要素を主動詞に複合させて、複雑述語を形成することで結果構文を生成する。特に、3つの言語タイプは、Washio (1997)のstrong resultatives、つまり、アスペクト転換が必要な結果構文の生成要件に大きな差があると言える。そこで、本論では、この点について以下のような言語タイプを提案する。

- (37) アスペクト転換を有するstrong resultativeの生成可否
 (i) ロマンス諸語：不可
 (ii) ゲルマン諸語：可能
 (iii) 日本語：不可(ただし、複雑述語を形成すると可能)

つまり、結果構文は、アスペクト転換という観点から見た時、3つの言語タイプに明確に差が生じ、また、(37)は、1.2節でまとめた移動動詞の言語的な差異をまとめた(25)と軌を一にすることが分かる。そこで次節において、2つの言語現象をまとめて「結果」を表す構文における言語のタイポロジーを提案する。

3. 「結果」を意味する構文における言語タイプ

ここまで移動動詞と結果構文に関して、それぞれの特徴に言及しながら主にアスペクト転換が必要な事実においてロマンス諸語、英語をはじめとするゲルマン諸語、日本語がどのような現れ方をするのかを中心に議論してきた。1.2 節で、移動動詞のアスペクト転換は、(A) 動詞句と着点句の共起・複雑述語の形成のいずれの手段によっても到着の含意が持たないロマンス諸語、(B) 動詞と着点句を共起させると、動詞自体に結果性の含意がなくとも結果の意味が生じるゲルマン諸語、(C) ゲルマン諸語と同じ結果性の含意を持たせるためには、主動詞と結果を表す形態素が複雑述語を形成することが必須な日本語の3つのタイプがあると結論づけた。また、Washio (1997)が提案するアスペクト転換が必要となる **strong resultative** においては、(A) 英語ではかなり自由にその生成が可能であるが、(B) ロマンス諸語では、それが制限され、(C) 日本語では、複雑述語の形成が必要であるとそれぞれの言語において振る舞いの差が見られる。どちらの構文においても、位置・状態の最終的な結果状態を意味し、特に、非有界述語から有界述語の転換を伴うアスペクト転換があることから、両構文は、意味的に等価な構文である。そこで、本論では、両構文は、同じ原理によって導きだされる言語現象であるとみなし (cf. 影山(1996))、アスペクト転換に関して、それぞれの言語が示す特徴から、以下のような言語タイプを提案する。

(38) アスペクト転換に関する言語タイプ

- (A) ロマンス諸語：あくまでも動詞が語彙的に含意するアスペクト特性を基軸として、統語的・形態的なアスペクト転換現象を有しない。
- (B) ゲルマン諸語：動詞自体のアスペクト特性は、動詞が着点句や結果述語など結果を含意する要素と共起することで比較的自由に行える。
- (C) 日本語：動詞自体のアスペクト特性は変更できないが、結果を含意する動詞を主動詞に編入して複雑述語の形成することで行う。

しかし、(38)はあくまでも一般化であって、Talmy (1985)のタイポロジーを形態的な観点から捉え直したにすぎず、理論的に高次の提案ではない。本論の目的は、「結果」を生み出す普遍的なメカニズムの解明であることから、(38)の一般化をより高次の理論によって捉え直し、人間言語を構成するメカニズムを提示する必要がある。そこで、次節で、述語のアスペクト特性と形態的な特徴について理論的な観点から分析するSnyder (1995), Snyder (2001)について概観して、(38)の理論的基盤を探る。

4. 形態要素と「結果」を表す構文：Snyder (1995), Snyder (2001)

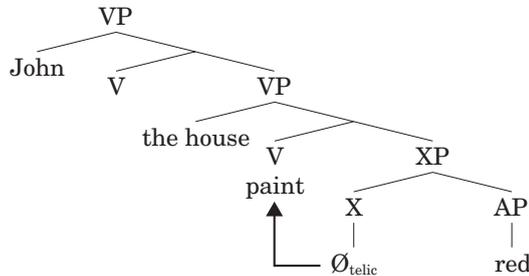
前節までに移動動詞及び結果構文にみられる言語的差異について、アスペクト転換の観点から形態的な特徴に注目して一般化を試み、(38)の3つの言語タイプを認めるべきであることを主張した。しかし、この提案は、あくまでも形態的な特徴から言語事実を捉えたものであって、一般化の域をでるものではなく、理論的検証性が低い。そこで、本節では、Snyder (1995), Snyder (2001)の分析を取り上げて、形態的なプロセスの有無がアスペクト性の予測に肝要であり、この観点から(38)に理論的枠組みを提供することが可能であることを示す。

Snyder (1995)は、「結果」を意味するいくつかの構文（結果構文、小辞を含む構文、移

動動詞など) について議論し、英語には音形には現れないが有界的な特徴をもつ形態素 (=Ø_{telic}) が統語構造に存在すると仮定することで、これらの構文の統語的・意味的特徴を説明できると分析する。例えば、英語の結果構文 (= (39a)) は、(39b)の統語構造を持ち、統語構造においてØ_{telic}が動詞と結合することで動詞が有界性を帯び、述語の解釈が有界的となるとする。

(39) a. John painted the house red.

b.



(40) $\parallel \emptyset_{telic} \parallel P(e)=\text{true}$, for any event e and any predicate of events P , iff for that event e' which is a subset of e and which is the natural endpoint of e , $P(e')=\text{true}$.

統語構造内に(40)のような解釈を持つØ_{telic}という形態素が生じると、そのホストとなる動詞がそれと結合し、述語全体がこの形態素の意味的特徴により有界的な特性を持つことが保証される。英語では、このような統語構造における形態合成プロセスによって、結果構文をはじめとした結果を含意する構文が自由に派生することが予測される。一方、ロマンス諸語であるが、以下のフランス語の例のように、英語と異なり結果構文が生成されない。

(41) a. *Elle a soigneusement essuyé la vaisselle.

'She carefully wiped the dishes.'

b. *Il a rit comme une baleine.

'He laughed like a whale.'

(Levin & Rapoport (1988):280)

問題となるのは、(41)が(39b)の統語構造を持てば、(41)が文法的であることを予測することである。この問題を解消するために、Snyder(1995, 2001)は、(39b)のような動詞とゼロ形態素を統語構造において合成されて、1つの動詞を形成できるか否かという形態合成プロセスが個別言語に存在しているか否かが結果構文の生成可否を決定すると論じている。

英語では、'teacup' というN-N複合語が存在するが、フランス語では、同じ表現を'tasse à thé' のように複合語ではなく名詞句で表現する (Snyder (1995: 469)。また、英語の 'frog man' という語は、「カエルに似た人」「カエルのように振舞う人」「カエルを集める人」といった「カエル」から連想される様々な特徴を持った人という意味で解釈されるが、それに相当するフランス語の 'homme grenouille' は、「潜水作業員」という語彙的に決められた意味しか存在しない (Snyder (2001:328))。これらの事実は、英語では、2つの形態素が統語構造上で結合し、解釈部門に送られるため多様な解釈を持ちうるが、フランス語では、統語構造における形態合成手段がなく、語彙部門で意味が確定し統

語構造に送られる。そのため、英語において合成語で表す単語もフランス語では句で表したり、英語では、緩やかな解釈を許す表現もフランス語では語彙的に単一の意味しか示すことができない。つまり、2つの言語タイプの間には、2つの形態素を統語構造において結合できるか否かに関して違いがあることになる。そのため、フランス語（などのロマンス諸語）では、複合語を作り出す統語的メカニズムがないということは、(41)が仮に(39b)の統語構造を持ったとしても、 \emptyset_{telic} をホストの動詞に結びつける形態合成手段がないことを意味し、統語構造において2つの形態素が合成されず、有界的な解釈を持つ構文が生成されない。そのため、結果構文の生成ができないと分析する。つまり、言語が有するアスペクト特性を有した形態要素が、結果を表す文の生成可否に強く関与するのである。

Snyderの提案で重要なのは、一見、「結果」の意味を生み出す表現に形態素が関与していないと思われる英語のような言語においても、それを生成するためには形態素が必要であることが示された点である。この分析に従うと、(38)のゲルマン諸語の特徴の記述は、形態的な特徴から再定義する必要がある。

既に指摘したように、日本語の結果の意味を作り出すいくつかの構文は、形態的な力を借りてアスペクト転換を起こす。

- (42) a. 1人の男がポーチに?*歩んだ／歩み出た。
 b. ヤシの実が浜辺に?*流れた／流れ着いた。(=(11))
- (43) a. 彼は鉄を平らにたたき延ばした。
 b. ランナーがシューズをボロボロに走り潰した。(=(36))

このような形態素がSnyder (1995)の仮定する \emptyset_{telic} の音声的な具現形であると分析可能なのか、検証が必要であり、議論の余地があるものの、Snyderの分析により結果を生じる形態要素の働きによって述語のアスペクト性が捉えられることが示されたことは、日本語の形態合成手段を基軸として、「結果」を表す構文の普遍性と個別性を考察する本論の方向性と一致するものである。

しかし、Snyderの分析には幾つか問題点がある。

Snyder (2001)において、日本語は、N-N複合と結果構文の派生について、英語と同じ振る舞いを見せるとして、2つの言語を同一の言語タイプに分類している。しかし、(32)・(34)のように、結果述語が動詞の意味から完全に独立していないweak resultativeは、日・英語で共通して結果構文の生成が可能であるが、結果述語が動詞の意味から完全に独立しているstrong resultativeは、英語のみ、その生成が可能で、結果構文の生成は日本語よりも英語の方がより広い分布を示す。

また、杉岡 (1998)が指摘するように、日本語の複合名詞は、英語の複合名詞とは異なる分布を示すものがある。英語の複合名詞は、基体となる述語の項要素が主名詞に編入できるが、付加詞（特に基体が他動詞のもの）は編入できない。

- (44) a. pasta-maker, letter-writing, potato-baking
 b. *fast-maker, *hand-making (of clothes), *pen-writing (of letters)

一方、日本語は、述語の語彙意味的な情報に従って、項関係にある要素だけでなく付加詞の要素も比較的自由に編入を許す。

- (45) a. 玉拾い、手紙書き、ねじまき、山崩れ
 b. よちよち歩き、黒焦げ、手作り、日焼け (杉岡 (1998):342-343)

つまり、2つの言語の複合名詞の形成方法が異なるのである。

Snyder (1995, 2001)は、「結果」を表す構文の派生についての普遍的な原理を提案し、個別言語の特徴をその言語が持つ形態プロセスの特徴から導いた。つまり、「結果」の意味を表すためには、如何なる形であっても形態要素が関与することが普遍の原理であって、それが関与しない言語においては、普遍的な特徴とは異なるパラメーター (= Parameter) の働きによって個別言語の特徴が導きだされると分析しなければならないことを示している。次節において、Snyderの分析を視野に入れながら、言語に普遍的に存在すると思われる2つの素性を導入して、(38)の言語タイプを捉えられる理論的検証性の高い普遍的メカニズムを提案する。

5. 「結果」を生み出す普遍原理と個別言語を生み出すメカニズム

前節までに、(I) 結果を表す構文を形態的観点から分類すると3つの言語タイプを認める必要があること ((38)参照)、(II) Snyder (1995)などの先行研究により英語のような一見すると「結果」を表す構文に形態要素が関与していないような言語においても、音声的に空の形態要素がその構文の生成に関与することが明らかにされ、「結果」を表す構文は、形態プロセスから捉えるべきであることを見た。

本節では、形態的な特徴から導きだした(38)の一般化を2つの素性を仮定することで、上記の3つの言語タイプがそれらの素性の組み合わせから自然に導きだされることを示す。

まず、日本語のようなアスペクト転換に明示的な形態素が関与する言語を捉えるために[Overt Morpheme](=[OM])という素性を仮定する。また、Snyder (1995)に従って、英語のように音形を持たない形態素がそれに関与することを捉えるために[Covert Morpheme](=[CM])の素性を仮定する。そして、これら2つの素性は、[±]の2つの値を持つ([±OM]/[±CM])と仮定する。これら4つの素性を組み合わせることで、以下のように4つの言語タイプ(そのうち1つは原理的には存在しない。)が言語に存在していることが予測される。

- (46) アスペクト転換に関わる言語のタイプ分け

	+ Overt Morpheme ([+OM])	- Overt Morpheme ([-OM])
+ Covert Morpheme ([+CM])	*	ゲルマン諸語
- Covert Morpheme ([-CM])	日本語	ロマンス諸語

ここで提案した[±OM]/[±CM]の素性は、個別言語の形態的な特徴から導き出した素性である。語彙の根幹をなし、意味を担う最小の単位である自由形態素、時制や一致、品詞転換などを担う拘束形態素と人間言語を構成するのは形態素である。これらの形態素、特

に、機能的な役割を果たす拘束形態素は、言語ごとに可視・不可視が異なる。本論の提案する形態的特徴を示した2つの素性は、このような形態素の一般的な特徴から導き出したものであり、その存在は妥当なものであると言える。

2つの素性の組み合わせによって、(46)のように(38)の3つの言語タイプが予測できる。日本語のように明示的な形態素を持つ言語は、[+OM], [-CM]、英語のように音声的に空の形態素が関与する言語は[-OM], [+CM]、ロマンス諸語のように形態要素が関与しない言語は、[-OM], [-CM]の素性をそれぞれ持ち、(38)の3つの言語タイプが、素性の組み合わせから導き出されることが分かる。この提案からTalmy(1985)の分析は、[±CM]の素性に関わる部分のみでタイポロジーを提案していたことが分かる。つまり、[+CM]の素性を持てば、**satellite-frame**言語が、[-CM]を持てば、**verb-frame**言語が認定される。しかし、前述の通り、このような視点のみでは、日本語とロマンス諸語の違いは捉えられず、[±OM]の素性を仮定することで、先行研究が捉えることができなかった事実を適切に予測できる。

(46)の提案は、前節で議論したSnyderの分析が抱える問題点も解消できる。日本語は、「ている」「てある」が代表であるが、述語のアスペクト特性を表示する形態素が豊富に存在する。また、「飲みかけのビール」の「かけ」（岸本(2000)など）「しぼりたてのミルク」の「たて」（山田(2005)）など述語のアスペクトを切り取り、連体修飾節を形成する形態素も存在する。さらに、英語では、**bark, bite**など動詞と名詞が同形でどちらの品詞にも対応する語が存在するが、日本語の場合、動詞から名詞を形成する際には、以下のように、その結果として生じる要素を名詞の一部として表示する必要がある（Kageyama (2001)参照）。

- (47) a. 吠え声
 b. 咬み傷 (Kageyama (2001):44)

つまり、日本語においては、可視的な形態素が「結果」を表すことが様々な言語現象において観察されるが、英語はそれに相当する形態素が明示的な形態要素として生じないことがある。このような事実は、日本語と英語の形態表示に音声的・形態的に表示の差が存在し、その明確な区別の必要性を示唆する。本論の提案は、日本語と英語が異なる素性の組み合わせを持つことで両言語の形態的要素の違いを的確に捉えることができ、また、N-N複合や結果構文の生成可否といった言語事実にその妥当性を求めなくても、形態的な特徴のみに言及することで理論的枠組みが提示できるため、Snyderの提案が抱える問題点を解消する。

ここで議論が必要となるのが、[+CM] [+OM] の組み合わせを持つ言語である。両方の素性が[+]の素性を持つと、可視・不可視の2つの形態素によってアスペクト転換がなされることとなる。このような言語タイプは、これまでの先行研究によって議論されてきた事実によって排除されると思われる。

Goldberg (1995)は以下のような例が非文法であることを指摘している。

- (48) a. *John kicked Bob a suitcase open.
 b. *She kicked him bloody dead.
 c. *Shirely sailed into the kitchen into the garden. (Goldberg (1995):82)

(48a)の使役変化構文においては、**kicked Bob a suitcase**という述語の段階で既に、**Bob**に**suitcase**が渡るという結果の意味を持っている。その述語にさらに結果述語である**open**を付加して**suitcase**の結果状態を表そうとしているが非文法である。(48b)は述部に結果述語が2つ共起した例、(48c)はそれに着点句が2つ共起した例であるが、どちらも述部の表す1つのできごとによって2つの結果状態を強いている。

また、**Jackendoff (1990)**は、以下のような結果性を強く含意する達成動詞は結果構文が生成できないことを指摘している。

(49) ***Harry destroyed / demolished / wrecked the car into bits.**

(Jackendoff (1990):117)

動詞が本来的にある(予見された)結果状態を含意する場合、動詞が含意する結果と異なる結果状態を結果述語によって強制しようとするとは非文法性を示す。この例でも、動詞を中心とした1つの述語が2つの結果状態を持つよう解釈を強制するため、非文法性を生じている。

これらの事実を説明するために、**Goldberg (1995)**は以下のような制約を提案している。

(50) **Unique Path Constraint:**

If an argument X refers to a physical object, then no more than one distinct path can be predicted of X within a single clause. The notion of a single path entails two things: (i) X cannot be predicted to move to two distinct locations at any given time *t*, and (ii) the motion must trace a path within a single landscape. (Goldberg (1995):82)

(50)で重要なのは、1つの事態あたり生じる結果は1つであるということである。(48)の例はどれも1つの事態に対して複数の結果を求めている。また、(49)は、動詞が含意する結果とそれと異なる結果状態と2つの結果を1つの文が表示することを求めている。これらの例は、(50)によって排除される。

影山(1996)は、日本語の複合動詞にも(50)の制約が働くことを観察している。

(51) a. *皿を投げ割った。(「投げつけて割った」という意味)

b. *目覚まし時計を蹴り壊した。

(影山 (1996):229)

(51a)では、「投げる」という物理的な移動と「割る」という状態変化の2つの「結果」を含意する要素が結合している。(51b)は、「蹴り飛ばされた時計が壁まで飛んで行って壁に当たって壊れた」という意味を持ち、その場合、「蹴る」が移動の意味を持ち、「壊す」が状態変化の意味を持つため、やはり、2つの「結果」を表す要素が結合している。

このように、1つの文には1つの結果を表示する要素のみが生じることができるというのが言語の普遍的な特徴であると考えられる。また、言語の経済性の立場から考察すると、ある1つの要素がある意味内容を示せば、同じ意味内容を他の要素でさらに明示的に示すことは避けられると考えられる。この議論から(46)の表で*で示された言語タイプが仮に存在すると仮定すると、結果を表すために二重の要素、つまり、**[+CM]**の音形に現れない「結果」を意味する形態素と**[+OM]**の明示的な「結果」を意味する形態素が1つの述語に

存在することとなる。このような場合、結果の表示に余剰性が生じ、言語の形式としては好ましくなく、言語がこのような形式をとることを避ける、極言すると、言語の形式としては許されないと考えられる。

本節では、普遍的な[±OM]、[±CM]という素性を仮定し、その組み合わせから(38)の3つの言語タイプが導き出されることを提案した。この提案により、Talmy (1985)のタイポロジーは、素性という抽象的な概念から導き出され、理論的検証性を備えた理論に昇華したと言える。

結語

本論は、これまで単なるタイポロジー (Talmy (1985)参照) として議論されてきた「結果」を表す表現における個別言語の現れ方の違いは、(i) 形態的な特徴 (特に、日本語の形態合成手段) を理論構築の中核に据えることで、これまで捉えられなかったverb-frame言語とsatellite-frame言語の区別と同じ言語群に分類される言語であっても、日本語とロマンス諸語のように現れ方に差が生じる事実を明確に捉えられる新たな言語タイプを認定し、(ii) その言語タイプは、人間言語の特性から導きだされる普遍的な素性 ([±OM]、[±CM]) を仮定することで理論的検証が可能な理論的枠組みから導き出されることを提案した。つまり、「結果」を表す表現は、2つの素性によってその意味の特徴が普遍的に捉えられ、2つの素性がそれぞれどのような値を持つのかによって、個別言語が生成することに適切な説明が与えられるのである。このような提案は、Chomsky (1981)以来の「原理とパラメーター (= Principles and Parameters)」を基盤とする言語理論に与するものであり、人間言語の普遍性と個別性を考える上で重要な提案であると思われる。

本論でとった言語事実の観察と理論的基盤の追求は、(A) 詳細な個別言語の事実観察により個別言語の特徴を明らかにし、(B) 観察した言語事実から言語に普遍的なメカニズムを導き出すことで、理論的基盤を与えるという言語の科学的考察によって、人間言語の生成メカニズムの解明 (Chomsky (2005)参照) に寄与すると考えられる。また、本論で取り上げた「結果」を表す表現は、人間の物事の捉え方といった認知的な側面に密接に絡み合う重要な言語現象であることから、人間の認知のあり方と言語表現の関係を考察する上で重要であると思われる。

注

- 1) 本論は、神田外語大学に提出した博士論文 (山田 (2006)) の一部 (主に第2章と第3章) を加筆・訂正したものである。また、本論は、平成18年度鳥根県立大学学術教育研究特別助成金 (研究テーマ「言語の普遍性と個別性に迫る: 「結果」性に関わる言語のタイポロジーの再考と理論的枠組みの提示」) の助成を受けて行った研究成果である。

- 2) ドイツ語でも、英語と同じパターンの語彙化が見られる。

- (i) a. Sie haben gestern viel getanzt.
they have-AUX yesterday much danced-PP.
b. Er ist zur insel geschwommen.
he is-AUX to-the island swum-PP. (吉田他 (2001):114)

また、以下の例のように、ドイツ語には移動様態動詞が多数存在している。

- (ii) bummeln 「ぶらつく」、flanieren 「ぶらぶら歩く」、hinken 「足を引きずって歩く」、

schlendern 「ぶらぶら歩く」、spazieren 「ぶらぶらのんびり歩く」 (吉田他 (2001):111)
つまり、「移動」の概念に「様態」の概念を包入させることで移動(様態)動詞を作る傾向を持つのは、ゲルマン諸語一般の特徴なのである。

3) このような複合述語の形成によるアスペクト転換は、日本語に限った現象ではなく、韓国語においても観察される。

(i) a. *John-i kongwon-ey talli-ess-ta.
John-Nom park-Loc run-Past-Decl
'John ran to the park.'

b. John-i kongwon-ey sip pwun man-ey /*sip pwun tongan talli-e ka-ss-ta.
John-Nom park-to ten minute in / ten minute for run-L go-PAST-DECL
'John ran to the park in ten minutes/*for ten minutes.'

(Oh & Zubizarreta (2004):111)

4) Washio (1997)と同様な視点から、同様の結論に至った分析と影山 (1996)があるが、本論では、以下の節でWashio (1997)が導いた結果構文のタイポロジーに深く言及するため、本節では、Washio (1997)の分析を考察する。

5) Washio (1997)は、以下のように、weak resultativeのように結果述語が動詞の意味を明示的に表示するものであるが、その状態性は段階的であり、また、本来、形容詞句で表される結果述語が副詞句としても表示できるような結果構文が存在するとする。

(i) a. He tied his shoelaces tight / tightly.

b. He tied his shoelace loose/loosely. (Washio (1997):17)

このような結果構文をspurious resultativeと呼んで3つ目のタイプとして認めている。本論での議論と直接関係がないのでその存在を認めるものの深く立ち入らない。

参考文献

- Aske, Jon. (1989) Path predicates in English and Spanish: A Closer look. *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society* 15, 1-14.
- Chomsky, Noam. (1965) *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on government and binding – Pisa lectures*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. (1986) *Knowledge of language*. New York: Praeger.
- Chomsky, Noam. (1995) *The Minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. (2005) Three factors in language design. *Linguistic Inquiry* 36, 1-22.
- Dowty, R. David. (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67, 547-619.
- Folli, Raffaella. (2001) *Constructing telicity in English and Italian*. Doctoral Dissertation, University of Oxford.
- Goldberg, E. Adele. (1995) *Constructions: A Construction grammar approach to argument structure*. Chicago, Ill.: University of Chicago Press.
- Hasegawa, Nobuko. (1998) Syntax of resultatives. In K. Inoue (ed.), *Researching and verifying an advanced theory of human language 2-(A)*, 31-58. Kanda University of International Studies.
- Higginbotham, James. (1999) Accomplishments. *Proceedings of the Nanzan GLOW*, 131-140.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- Keyama, Taro. (2001) Polymorphism and boundedness in event/entity nominalization. *Journal of Japanese Linguistics* 17, 29-57.

- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社出版
- 岸本秀樹(2000)「非対格性再考」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』71-110. ひつじ書房
- Levin, Beth and Tova Rapoport. (1988) Lexical subordination. In *Papers from the twenty-fourth regional meeting, Chicago linguistic society*, 275-289.
- Levin, Beth and Malka Rappaport, Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-lexical semantic interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Oh, Eunjeong and Maria. L. Zubizarreta. (2004) What the Korean manner-of-motion construction can teach us about the lexicon-syntax interface. *Proceedings of 6th Seoul international conference on generative grammar*. (<http://www-rcf.usc.edu/~zubizar/mlz/Seoul%20Conference-2004.pdf>)
- Ohara, H. Kyoko. (2002) Linguistic encodings of motion events in Japanese and English: A Preliminary look. 『日吉紀要英語英米文学』41, 122-153. 慶応大学
- Slobin, I. Dan. (1996) Two ways to travel: Verbs of motion in English and Spanish. In M. Shibatani and S. A. Thompson (eds.), *Grammatical constructions: Their Form and meaning*, 195-220. Oxford: Oxford University Press.
- Snyder, Willaim. (1995) A Neo-Davidsonian approach to resultatives, particles, and datives. *Proceedings of the north east linguistic society* 25, 457-471.
- Snyder, William. (2001) On the Nature of syntactic variation: Evidence from complex predicates and complex word-formation. *Language* 77, 324-342.
- 杉岡洋子(1998)「動詞の意味構造と付加詞表現の投射」井上和子(編)『研究報告(2)先端的言語理論の構築とその多角的な実証(2-B)』341-363. 神田外語大学
- Talmy, Leonard. (1985) Lexicalization pattern: Semantic structure in lexical forms. In. T. Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description (vol. 3): Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press. (Reprinted in Talmy, Leonard. (2000) *Toward a cognitive semantics (vol. 2): Typology and process in concept structuring*, 21-146. Cambridge, Mass.: MIT Press.)
- 田中茂範・松本曜(1997)『空間と移動の表現』研究社
- Tenny, Carol. (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantic interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- Washio, Ryuichi. (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- 山田昌史(2005)「結果の焦点化：『たて』構文の分析」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム』1号 267-293.
- 山田昌史(2006)『アスペクト転換と統語構造：結果性を統語構造から予測する』博士論文 神田外語大学
- Yoneyama, Mitsuaki. (1986) Motion verbs in conceptual semantics. *Bulletin of the faculty of humanities* 22, 1-15. Seikei University.
- 吉田光演・保阪靖人・岡本順治・野村泰幸・小川暁夫(2001)『現代ドイツ言語学入門一生成・認知・類型のアプローチから』大修館書店

Abstract

Talmy's (1985) proposal had a great contribution to the analyses of how we could describe the motion event. He classified languages into two types (i.e., satellite-frame languages and verb-frame languages); however, his classification was nothing but a typology on language and lacks of theoretical basis. And also it could not capture the fact that Japanese has to form complex predicates to express the event with completion of the action described by the main verb. It, therefore, seems to have some empirical and theoretical problems.

In this paper, I, focusing on the sentences which express the resultant state after terminating the event described by their predicate, argued that Talmy's typology is subsumed under the aspectual properties of predicates and that languages should be classified into three types on the basis of the morphological nature of each languages; Germanic languages, Romance languages and Japanese-type languages. I assumed two features [\pm Overt Morpheme] and [\pm Covert Morpheme] and proposed that these features bear the aforementioned language types if we mix them all. Germanic languages have [-OM]/[+CM] features, Romance languages [-OM]/[-CM], and Japanese-type languages [+OM]/[-CM], respectively. The remaining combination, [+OM]/[+CM] is excluded by Goldberg's (1995) uniqueness path principle.

The analysis proposed here captures Talmy's typology and also predicts the universal property and language variation of the data argued here only by assuming two features derived from morphological properties of each languages along the line with Minimalist Program proposed by Chomsky (1995, 2005).

キーワード：「結果」を表す構文 述語のアスペクト特性
言語の普遍性と個別性 形態的特徴に基づく言語理論

(YAMADA Masashi)